Title	アイヌ語幌別方言における名詞化辞の文法化
Author(s)	高橋, 靖以
Citation	北方言語研究, 8, 107-114
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/68732
Туре	bulletin (article)
File Information	06takahashi.pdf



アイヌ語幌別方言における名詞化辞の文法化

高橋 靖以(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

1. はじめに

本稿では、アイヌ語幌別方言の証拠性に関わる名詞化辞について分析をおこなう。アイヌ語の証拠性に関わる名詞化辞の用法には方言差がみられる。以下では、幌別方言の証拠性に関わる名詞化辞において、補文節と副詞節のマーカーとしての用法がみられることを指摘する。さらに、文法化という観点から上記の現象について考察する。

2. 証拠性を表す名詞化辞の一般的用法

証拠性 (evidentiality) は情報のソースを示す言語カテゴリーと定義される (Chafe and Nichols 1986, Aikhenvald 2004)。類型論的観点から、証拠性には視覚 (visual)、視覚以外の感覚 (non-visual sensory)、推論 (inference)、仮定 (assumption)、伝聞 (hearsay)、引用 (quotative) というパラメータが設定されている (Aikhenvald 2004: 63-64)。

アイヌ語における証拠性の表現には名詞化辞 (nominalizer) が用いられる (金田 1931、金田 ・知里 1936、浅井 1969、Refsing 1986、田村 1988、佐藤 2008)。幌別方言の証拠性を表す名詞化辞は、siri (視覚による認識)、humi (視覚以外の感覚による認識)、ruwe (証拠に基づく確定的な認識)、hawe (発声による認識) の4種類である。

アイヌ語において、証拠性に関わる名詞化辞は補文節のマーカーとして機能する。以下 に幌別方言の例を示す¹。

(1) [a-kor ainu a-wenokbare shiri]
INDEF.TR.SUBJ-持つ 人間 INDEF.TR.SUBJ-不孝をする NOM
a-eshikarun chiki tu kishnu nupe
INDEF.TR.SUBJ-思い出す CONP 二つの かすかな 涙
a-vaikoranke.

INDEF.TR.SUBJ-みずから落とす

「私は父親に不孝をしていることを思い出し、少し涙を流し (shiri は「不孝をする」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一1966b: 246)

(2) [a-kishma humi] yupke rok be INDEF.TR.SUBJ-つかむ NOM 強い VP NOM

* 本稿は「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班平成 26 年度第 2 回研究会(国立国語研究所、2015 年 1 月 10 日)での口頭発表の一部に加筆・修正をおこなったものである。

[「]以下に示す幌別方言の例文の表記は、引用文献の表記に従った。引用文献の表記は音韻表記とは性格の異なるものである(例えば /siri/ は shiri と表記されている)。なお、例文の理解を容易にするため、議論の焦点となる補文節と副詞節に[]を付し、訳文を変更した。

Atuiyaumbe rarak konru ne a-tekbosore アトゥイヤウンペ なめらかである 氷 CMP INDEF.TR.SUBJ-腕を抜けさせる 「つかまえた手応えは確かであったのに、アトゥイヤウンペ (人名) はなめらかな氷 のように私の腕を抜けていった (humi は「身体をつかまえる」という感覚の認識を表す)」 (金成・金田-1966a: 309)

- (3) [a-ewak shiror pirika **ruwe**] an-erayapka,
 INDEF.TR.SUBJ-住む ところ 良い NOM INDEF.TR.SUBJ-感心する
 「私は住まいの美しい様子に感嘆した (ruwe は「住まいが美しい」という確定的な認識を表す)」(金成・金田一 1966b: 83)
- (4) [kamui rametok katkor hawe]a-oyanenena.神 勇者 振る舞う NOM INDEF.TR.SUBJ-残念に思うFP「私は神の如き勇者がそのように言うことを残念に思う (hawe は勇者の発言に基づく認識であることを表す)」(金成・金田一 1964: 336)

3. 副詞節のマーカーとしての名詞化辞

幌別方言においては、証拠性を表す名詞化辞が副詞節のマーカーとして機能する²。アイヌ語の中でも詳細な文法記述が公刊されている沙流方言においては、類似の現象は報告されていない(田村 1988)。

3.1 副詞節のマーカーとしての siri

副詞節のマーカーとしての siri の例を以下にあげる。

(5) kamuineambe naanipakbe a-ekarkar shiri okai 神である者 今にも INDEF.TR.SUBJ-する NOM ある rok be, a-tak ko [neiambe kusu VP NOM それ ために INDEF.TR.SUBJ-招く **CONP** arki a-ki shiri] wen iyokunnure kane. 来る CONP 悪い 整き INDEF.TR.SUBJ-する 「(幌尻岳の神によって) 神である者は今にも殺さるところであったが、(幌尻岳の神 は)招待されるとやって来たので私はとても驚いた(shiriは「幌尻岳の神が来た」と いう事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一1959:367)

(6) somo ibe no [e-tumsak shiri] 2SG.SUBJ-カを欠く NEG 食べる **CONP CONP Frametok** temkor kovaitekani e-ki shiri] 勇者 腕の中 みずから手を取る CONP 2SG.SUBJ-する chituvashkarap e-ekarkar-an vakka 憐れむ 2SG.OBJ-する-INDEF.INTR.SUBJ **CONP** tane anakne ene a-kar i 今 TOP このように INDEF.TR.SUBJ-する NOM a-ye isam. ene このように INDEF.TR.SUBJ-言う NOM 無い

「あなたは食事もせず力の無い様子であるのに、勇者の元へ向かっていくことを憐れに思うが、今はどうすることも何を言うこともできない (shiri は「主人公ががやつれた姿で戦いに行く」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1961: 144)

(7) kamui shiri okai wa semash ne 大したことのない 神 様子 CMP いる CONP seshserke koseutkanrikin kane iki aine 背骨を高く上げる する すすり泣き VP CONP [hebuni koshikepuni shiri] shiso be am 顔を上げる CONP 右座 いる 者 目を上げる CMP kurkashike itakomare ene okai このように ある 上 言葉を発する NOM

「(妹は) 神の如き様子で大袈裟なすすり泣きをしたあげく、顔を上げると右座にいる者へ目を向けてこのように言った (shiri は「妹が顔を上げる」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1963: 175)

- (8) [Shupshupkami a-wenyup-i oar atusa シュプシュプカミ INDEF.TR.SUBJ-悪い兄 まったく 裸である shiri] Ishkar ek wa i-koan. ta **CONP** 石狩 **CMP** 来る CONP INDEF.OBJ-共にいる 「シュプシュプカミ (人名)、悪い兄が裸で石狩に来て私と一緒にいる (shiri は「兄 が裸である」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田-1963:353)
- (9) terke tuika ta iki korkaiki 跳ねる 上 CMP する **CONP** [a-tureshipo shimoipa shiri] shiyoro keutum INDEF.TR.SUBJ-妹 奮闘する 整く 心 CONP a-yaikore. INDEF.TR.SUBJ-みずからに与える

「跳躍しながらではあるが、私は妹の奮闘する様子に驚きの気持ちを抱いた(shiri は 「妹が奮闘する」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一1964:282)

rorumbe kashi chiobash e-i-y-ekarkar (10) [a-kor

INDEF.TR.SUBJ-持つ 戦い H 走る 2SG.SUBJ-INDEF.OBJ-EPEN-する

shiri shino nupetne-an.

CONP まことに 喜ぶ-INDEF.INTR.SUBJ

「(ニショルンサンタ(地名)の兄が)私の戦いの救援に駆けつけてくれてまことに 嬉しい(shiri は「兄が救援に来た」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田 - 1966b: 221-222)

3.2 副詞節のマーカーとしての humi

副詞節のマーカーとしての humi の例を以下にあげる。

(11) a-kor huchi kushkeraibo keshto ye an ko INDEF.TR.SUBJ-持つ祖母 言う CONP 毎日 ある CONP keran ibe batek Sonno a-ki humi] 本当に 美味しい 食事 INDEF.TR.SUBJ-する CONP AP

shino nubetne-an

まことに 喜ぶ-INDEF.INTR.SUBJ

「祖母が言ってくれたおかげで、私は毎日美味しいものばかりを食べてまことに嬉し い(humi は「食事が美味しい」という味覚を表す)」(金成 forthcoming)

3.3 副詞節のマーカーとしての ruwe

副詞節のマーカーとしての ruwe の例を以下にあげる。

(12) shukup menoko shukup matkachi 年若い 女性 年若い 少女 **CONP**

[kamui turano chiyainikoroshmare

INDEF.TR.SUBJ-である

神 CMP みずから恥をかく

a-i-y-ekarkar yayekatuwen ruwe]

INDEF.TR.SUBJ-INDEF.OBJ-EPEN-するCONP みずから恥じる

a-ki kusu sonno am be INDEF.TR.SUBJ-する CONP まことに ある NOM

a-vaikeuorochiwe a-ramu kuni korka,

INDEF.TR.SUBJ-みずから身を棄てる CONP INDEF.TR.SUBJ-思う **CONP** 「私は若い女性、若い娘であるのに、神々とともに恥辱を与えられて恥ずかしく思い、

身を投げ棄てようと思ったが(ruweは「恥辱を受けた」という確定的な認識を表す)」 (金成・金田一 1959: 177)

(13) Kemkakarip hawokai awa itak hetapne ケムカカリプ 言う CONP AP 言葉 okai kuni a-ramu awa, ある NOM INDEF.TR.SUBJ-思う **CONP**

[pon menoko shiretok kor **ruwe**] 小さい 女性 美貌 持つ **CONP**

shiyor keutum a-yaikore,

驚く 心 INDEF.TR.SUBJ-みずからに与える

「ケムカカリプ (人名) が言ったが、口先だけだろうと思ったのに、若い女性の美しい様子に私は驚嘆した (ruwe は「女性が美貌である」という確定的な認識を表す)」 (金成・金田-1964:205)

3.2 副詞節のマーカーとしての hawe

副詞節のマーカーとしての hawe の例を以下にあげる。

(14) ouse shine pakesh kusu tumi ne yakka ただ 一つの 飲みさし CMP 戦い である CONP

[orsaureko a-i-koashi **hawe**] 激しく INDEF.TR.SUBJ-INDEF.OBJ-立つ CONP

sonno irushka-an koroka, まことに 怒る-INDEF.INTR.SUBJ CONP

「ただ一杯の飲みさしのために激しい戦いを起こされて、私は激しく怒ったが (hawe は「酒宴での出来事が原因となって戦いを起こされた」という事象の伝聞を表す)」 (金成・金田 1959: 164)

上記のように、証拠性に関わる四つの名詞化辞は副詞節のマーカーとしても用いられる。 また、証拠性に基づく意味の対立は、副詞節においても存在するものといえる。

4. 証拠性を表す名詞化辞の文法化

アイヌ語の証拠性を表す名詞化辞は、以下のように、名詞からの文法化 (grammaticalization: Hopper and Traugott 1993) によって形成されたものであることが推定されている(金田一1931、金田一・知里1936、田村1988)。

siri「(周囲の)様子」(名詞) > siri「視覚による認識」(名詞化辞) humi「音、身体感覚」(名詞) > humi「視覚以外の感覚による認識」(名詞化辞) ruwe「道、跡」(名詞) > ruwe「証拠に基づく確定的な認識」(名詞化辞) hawe「声」(名詞) > hawe「発声による認識」(名詞化辞)

この文法化に加え、幌別方言では以下の変化が生じたと推定される。

siri「視覚による認識」(名詞化辞) >siri「視覚による認識」(接続助詞)

humi「視覚以外の感覚による認識」(名詞化辞) >humi「視覚以外の感覚による認識」(接続助詞)

ruwe「証拠に基づく確定的な認識」(名詞化辞) >ruwe「証拠に基づく確定的な認識」(接続助詞)

hawe「発声による認識」(名詞化辞) >hawe「発声による認識」(接続助詞)

この文法化は、副詞節のマーカーが関与する文法カテゴリーとして、証拠性が新たに取入れられるプロセスと理解することができる。なお、副詞節には、アスペクチュアリティーやモダリティーに関わる情報が含まれる場合がある。

(15)	"pon	a-kor			yub-i		uitek		kuru
	小さい	INDEF.TR.SUBJ-持つ			兄-POSS		使用する	5	人
	i-koimekar	e		shiri	ne	yakun	pon		
	INDEF.OBJ-食物を分ける a-kor yub INDEF.TR.SUBJ-持つ 兄-F			NOM	である	CONP	小さい		
				-i	i-koimekare			kun	i
				POSS	INDEF.OBJ-食物を分ける			VP	NOM
	korachi	an	ruwe	ne."	ari	itak	kane	uina	wa
	CMP	ある	NOM	である	QP	言う	CONP	取る	CONP
	[emina rusui koro]		e.						
	笑う	VP	CONP	食べる					

「(イヨチウンマッ(人名)は)『年若い兄の使用人がご馳走を分けてくれるならば、年若い兄が分けてくれるようなものだ』と言って受け取り、笑いを堪えながら食べた(koro によって「笑いを堪えながら」という進行を表す副詞節が形成されている)」(金成・金田-1966a: 212)

(16)	[sapa	ne	kotom]	a-ramu		kamui	utara
	頭領	である	CONP	INDEF.7	TR.SUBJ-思う	神	たち
	otu	sanashke		ore	sanashke	ashke ukaenoi	
	二つの	手		三つの	手	揉み手を	をする
	tuwan	onkami	rewan	onkami	ukakushpare		
	二十の	拝礼	三十の	拝礼	繰り返す		

「頭領であるらしく思われる神々は何度も揉み手をして、二十の拝礼、三十の拝礼を繰り返した(kotom によって「頭領であるらしく」という推測を表す副詞節が形成されている)」(金成・金田-1959:212)

上記の文法化は、アスペクチュアリティーやモダリティーに加えて、副詞節において実現しうる文法カテゴリーを多様化させる変化といえる。この問題は、アイヌ語の従属節の統語論的な性格を考察する上で重要なものと考えられる。

また、言語類型論的観点からは、上記の文法化は多用途的名詞化 (versatile nominalization: Noonan 1997) の顕著な例と考えることができる。すなわち、この現象はアイヌ語の構造的類型を考える上でも示唆に富むものといえる。

5. おわり**に**

本稿では、アイヌ語幌別方言の証拠性に関わる名詞化辞について分析をおこない、補文節と副詞節のマーカーとしての用法がみられることを述べた。さらに、文法化という観点から上記の現象について考察をおこなった。アイヌ語において、文法化の研究は今後の課題といえる。特に、文法化の研究において、方言的多様性に注目することは有意義であると考えられる。今後、諸方言の記述的研究が進展することにより、文法化に関して多くの知見が得られるものと思われる。

略号

1: first person, 2: second person, AP: adverbial particle, CMP: case marking particle, CONP: conjunctive particle, EPEN: epenthesis, FP: final particle, INCL: inclusive, INDEF: indefinite, INTR: intransitive, NEG: negation, NOM: nominalizer, OBJ: objective, PL: plural, POSS: possessive, PRON: pronoun, QP: quotative particle, SG: singular, SUBJ: subjective, TOP: topic marker, TR: transitive, VP: verbal particle

参照文献

Aikhenvald, A. Y. (2004) Evidentiality. Oxford: Oxford University Press.

浅井亨 (1969)「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』下: 771-800. 東京: 第一法規.

Chafe, W. and Nichols, J. (eds.) (1986) Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology. Norwood, NJ: Ablex.

知里真志保 (1942)「アイヌ語法研究」『樺太庁博物館報告』4(4)(『知里真志保著作集』3. 455-586. 東京: 平凡社,1973 所収).

Hopper, P. J. and E. C. Traugott. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

金成まつ (forthcoming)『アイヌ叙事詩:鳥のさえずり』札幌:北海道教育委員会.

金成まつ・金田一京助(1959)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』1. 東京: 三省堂.

金成まつ・金田一京助 (1961) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 2. 東京: 三省堂.

金成まつ・金田一京助 (1963) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 3. 東京: 三省堂.

金成まつ・金田一京助(1964)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』4. 東京: 三省堂.

金成まつ・金田一京助(1966a)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』6. 東京: 三省堂.

金成まつ・金田一京助(1966b)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』7. 東京: 三省堂.

金田一京助(1931)『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』第2巻. 東京: 東洋文庫.

金田一京助・知里真志保 (1936)『アイヌ語法概説』東京:岩波書店 (『知里真志保著作集』 第4巻、東京:平凡社、1974 所収).

- Noonan, M. (1997) Versatile nominalizations. In J. Bybee, J. Haiman and S. A. Thompson (eds.) *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to T. Givón*. Amsterdam: John Benjamins. 373-394.
- Refsing, K. (1986) *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*. Arhus: Aarhus University Press.

佐藤知己 (2008)『アイヌ語文法の基礎』東京: 大学書林.

田村すず子 (1988)「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典』 1:6-94. 東京:三省堂.

Grammaticalization of Nominalizer in the Horobetsu Dialect of Ainu

Yasushige TAKAHASHI (Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University)

This paper analyzes evidential nominalizer in the Horobetsu dialect of Ainu. In the dialect, evidential nominalizer may function as a marker of complement clause and adverbial clause. This versatile nominalization may be interpreted as the grammaticalization of evidential nominalizer.

(たかはし・やすしげ takahashi@let.hokudai.ac.jp)